

中学校

平成 5 年 度

教育 研究 員 研究 報告 書

教育 課題

東京都教育委員会

平成 5 年 度

教育研究員名簿（教育課題）

分科会名	区市町村名	学 校 名	氏 名
進路指導分科会	文 京	第 八 中 学 校	大 室 滋
	江 東	第 二 砂 町 中 学 校	吉 浜 利 洋
	大 田	大 森 第 一 中 学 校	細 越 政 道
	荒 川	南 千 住 第 二 中 学 校	松 原 幸 春
	練 馬	練 馬 中 学 校	関 屋 裕 之
	足 立	第 十 一 中 学 校	小 関 朝 之
	江 戸 川	二 之 江 中 学 校	◎ 岡 正 雄
	八 王 子	檜 原 中 学 校	楠 美 利 文
	青 梅 分 寺	泉 中 学 校	福 島 喜 彦
	第 四 中 学 校	仮 屋 昭 敏	
生活指導分科会	新 宿	四 谷 第 一 中 学 校	○ 廣 木 智 之
	台 東	浅 草 中 学 校	宮 田 文 夫
	目 黒	第 八 中 学 校	松 尾 宏
	世 田 谷	八 幡 中 学 校	杉 本 康 司
	板 橋	高 島 第 二 中 学 校	腰 尾 豊
	町 田	本 町 田 中 学 校	堀 田 敏
	町 田	鶴 川 第 二 中 学 校	桜 井 正 明
	狛 江	狛 江 第 三 中 学 校	上 松 達 三
	東 大 和	東 大 和 第 四 中 学 校	深 谷 恭 司
	東 久 留 米	下 里 中 学 校	山 村 智 昭

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 山 本 修 次  
多摩教育事務所指導課指導主事 原 雅 夫

# 目 次

I 教育課題部会研究主題設定の理由 .....	2
II 進路指導分科会の研究 .....	3
「意欲的な生き方を育てる進路指導の工夫」	
1. 副主題設定の理由 .....	3
2. 研究の方法 .....	3
3. 研究の構造 .....	4
4. 研究の内容 .....	5
(1) 職場訪問の実践 .....	5
(2) 職場訪問のまとめ .....	7
(3) 職場訪問を中心とした進路学習における変容 .....	10
5. 進路指導分科会の研究のまとめと今後の課題 .....	13
III 生活指導分科会の研究 .....	14
「一人一人の生徒が生き生きと活動し、自己実現の図れる指導の工夫」	
1. 副主題設定の理由 .....	14
2. 研究の方法 .....	14
3. 研究の内容 .....	15
(1) 生徒の活動場面と充実度・満足度意識に関する調査 .....	15
(2) 考察 .....	16
(3) 具体的な実践例 .....	16
4. 生活指導分科会の研究のまとめと今後の課題 .....	24

## I 主題設定の理由

現代の子どもたちは、主体性に乏しいと言われる。子どもたちの言葉・行動を見ても、皆と一緒になければ動けないとか、皆と同じ行動をしていれば安心・安全といった発想が見られる。また、現代の子どもたちは、指示待ち人間であるとも言われる。自分からは進んで物事を取り組もうとしない傾向も少なくない。

子どもたちのこういった状況の背景には、現代の子どもたちを取りまく環境が、激変していることが考えられる。家庭においては、核家族化・少子化によって、大勢の人とかかわり合って生活するということができなくなっている。地域においては、都市化等によって、「広場・遊び場」がなくなり、年令を越えて一緒に遊ぶということが少なくなった。学校においても、放課後親しい友人同士とか、尊敬する先輩と後輩とかの語り合いが少なくなった。つまり、人が人たることを学ぶ「場」や、人とかかわり合いが少なくなっている。こうした人間関係の希薄化や直接体験の欠如が、現代の子どもたちの自立の遅れや、たくましさに欠ける傾向を生み出している。

これからの子どもたちには、生涯を通じて意欲的に学び続け、何事に対しても主体的に取り組む、たくましく生き抜いていく資質や能力を身につけることが、是非とも必要である。こうした背景や状況をふまえて、「自己の個性・適性を生かし、自ら学ぶ意欲を育てる指導の工夫」という本主題を設定した。

教育課題部会では、進路指導分科会と生活指導分科会とに分かれ、それぞれ生徒の主体的な活動を組織し、実際に体験することに主眼をおき、体験の共有と広がり重視した研究実践に取り組んだ。

進路指導分科会では、身近な職業調べ・職場訪問・上級学校訪問について研究実践を行い、生活指導分科会では、学校行事・学級活動・教科学習の具体的実践を通して、研究に取り組んだ。

## Ⅱ 進路指導分科会の研究

### 進路指導分科会副主題

#### 意欲的な生き方を育てる進路指導の工夫

##### 1. 副主題設定の理由

最近の中学生の様子を見てみると、将来について、はっきりとした希望や目的をもたず、漠然と学校生活を送っている生徒が多い。進路を選択する際にも、自分が上級学校で何をやりたのかという夢や希望をもって選ぶのではなく、自分の学習成績にのみたよった上級学校選択をする傾向が強い。

各中学校における進路指導も、3年間を見通した指導計画を立てるが、実際は、第3学年の進学指導に重点がおかれている。1・2学年の進路指導は効果がすぐに現れないからやりづらという現場の声もある。また、自分の将来を考えさせるために、これまでも各中学校において、上級学校訪問を始めとして、さまざまな体験活動が実践されているが、見聞体験にとどまっていたり、体験の共有や他への広がりがないなど、自分の生き方を問い直す活動になっていない。

こうした現状をふまえ、中学校におけるこれからの進路指導は、生徒一人一人に、将来の生き方に関心を持たせ、意欲的に生きる姿勢を育てる指導やそのための体験活動が必要となってくると考える。そこで本分科会では、「啓発的な体験学習による進路指導を行うことによって意欲的な生き方のできる生徒が育つ」ことを目指し、上記の副主題を設定した。

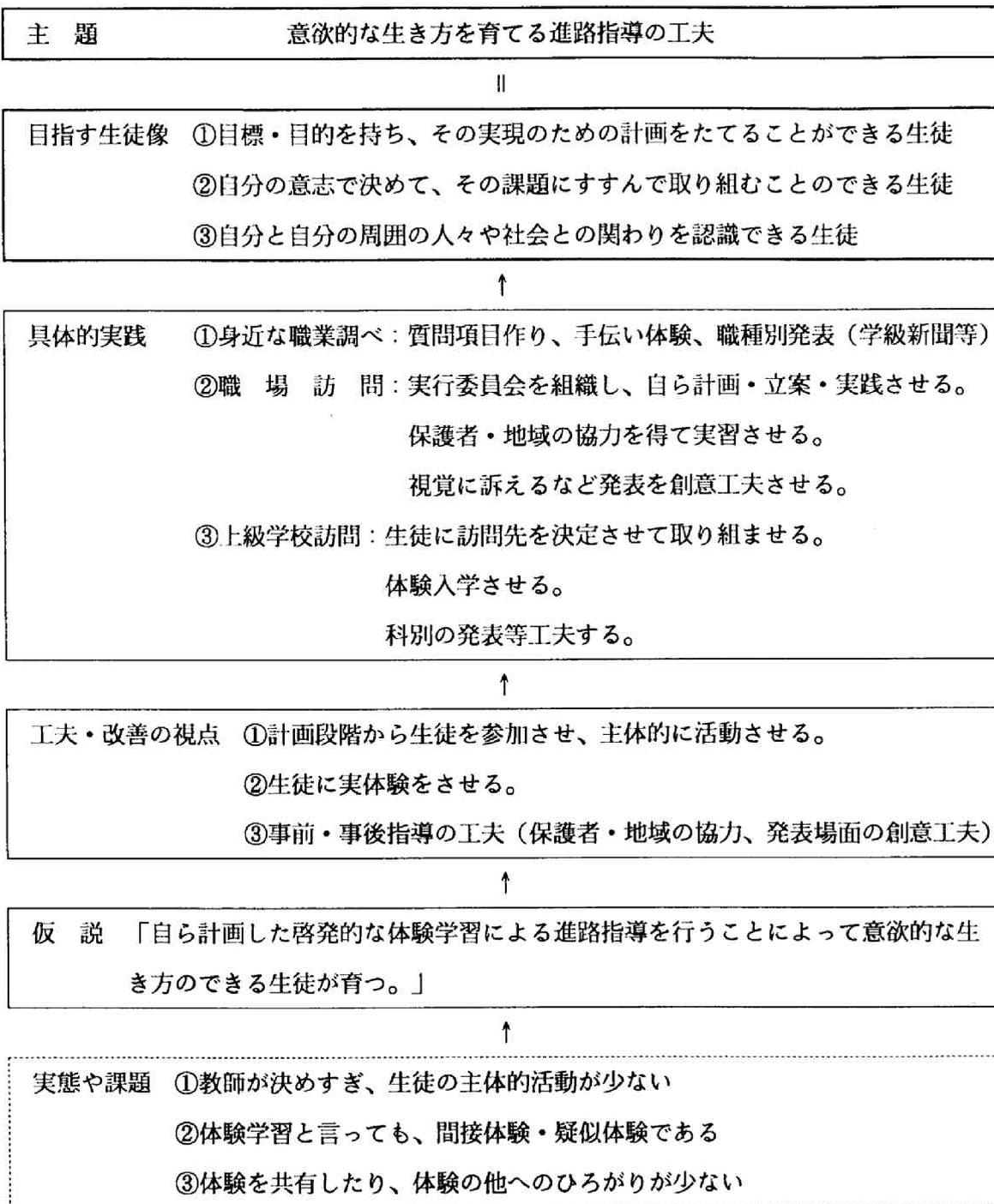
##### 2. 研究の方法

啓発的な体験学習は、これまでも多くの学校において実践されてきたが、その目的が達成されたかについては、十分でない面がある。そこで、「意欲的な生き方を育てる進路指導」を実現させるために、より効果的な体験学習の実践の工夫・改善を図った。

本分科会では、次のような進め方により研究を行い、啓発的な体験学習の問題点を明らかにし効果的な指導の在り方を目指した。

- ア. 従来の体験学習（1年…身近な職業調べ 2年…職場訪問 3年…上級学校訪問）における実態や課題を明らかにし、事前、当日、事後における指導内容・方法を工夫・改善し、本分科会研究員の所属する学校において実践する。
- イ. 体験学習の事前・事後に、生徒の意識調査を実施し、工夫・改善した指導内容・方法に効果があるか、分析・考察を行う。

### 3. 研究の構造



#### 4. 研究の内容

##### (1) 職場訪問の実践

###### ア. 目的

- (ア) 仕事の内容や、様々な職業に就くために必要な資格や適性を知る。
- (イ) 働く人との交流や、職場での実体験を通して、働くことの喜びや厳しさを知り、働くことの意義を考えることにより、意欲的な生き方を探る。
- (ウ) 希望の職業に就くには、中学時代に何をやっておく必要があるかを学ぶ。
- (エ) 生徒が自主的に職場訪問に参加することにより、主体的に進路を選択する能力を高める。
- (オ) 職場訪問を通して、人と人の接し方のマナーやルールを身に付ける。

###### イ. 職場訪問の実施計画（2 学年）

月	実 施 内 容
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路指導部・学年会にて、職場訪問の原案検討</li> <li>○アンケートによる意識調査と『働くことの意義』について学級活動</li> <li>○職場訪問について説明○生徒の実行委員会（A校）・進路委員会（B校）の結成</li> <li>○訪問希望調査◎希望職業の集約</li> <li>○学区域近隣の事業所・施設のリストアップ</li> <li>○職場訪問に対して保護者の協力を要請</li> <li>○事業所・施設への職場訪問の依頼○訪問する職場を決定</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎訪問する職場を班長会にて決定</li> <li>○『働くことの意義』について、職業人の講話会（A校）</li> <li>◎訪問先の事前学習と質問事項や役割の検討</li> <li>○職場訪問の心構えと諸注意◎職場訪問の実施</li> <li>◎報告書・感想文の作成とアンケートの実施</li> <li>◎生徒による礼状の作成・送付○職員の御礼訪問◎訪問先へ礼状持参（B校）</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎発表会の準備（冊子作り、写真やビデオの整理）</li> <li>◎体験発表会</li> <li>○事後アンケートによる意識調査と『将来への展望』について学級活動</li> </ul>

◎は生徒の実行委員会（A校）・進路委員会（B校）の活動内容

ウ. 具体的な実践事項

(ア) 訪問班について

A校 生活班で実施。

B校 訪問希望職種にて班を編成。(学級内での編成を原則とする)

(イ) 訪問先の選定について

希望を尊重して班長会で決める。運営は実行委員会・進路委員会で行う。

<選定までの流れ>

訪問希望職業調査→集約→希望順に職場をリストアップ→保護者・地域への協力要請  
→訪問する職場の決定→班会議で希望職場を決定→班長会にて最終決定

(ウ) 質問事項について

<共通質問事項>

○仕事の内容 ○その仕事に就くための資格・条件 ○その仕事をしていて良かったこと  
○その仕事をしていてつらかったこと ○その仕事に就いた動機 ○中学時代にどんな努力をすればよいか

班会議にて職種に応じて他の質問項目を検討し、役割分担を行う。

(エ) 講話会について (A校の工夫)

働くことの意義をより深めるために、職業人から話を聞く。

講話者についてはPTA学年委員に呼びかけ、中学校卒業者を採用している会社か、卒業生の保護者に依頼する方向で決める。

(オ) 事業所・施設への依頼について

依頼するときに単に説明だけでなく、実体験の意義について理解を得て、できるだけ実体験を実施していただく方向で依頼する。

(カ) 体験発表会について

保護者に参観を呼びかけ、親子共通の話題作りをする。

写真やビデオなどの視聴覚機器を利用したり、冊子以外に模造紙にまとめるなど発表の方法を工夫して、体験の共有ができるようにする。

<工夫例>

寸劇の要領で質問場面を再現

駅員の帽子を作るなどの活動

司会者が発表者に対して「働く人を見てどう思いましたか」などと質問

(2) 職場訪問のまとめ

A校の職場訪問における実践として見学や説明を聞くだけでなく、できるだけ実体験を行うことに重点をおいて取り組んだ。そのことによって生徒の充実感が深まりひいては意欲が高まると考え実施した。しかし、実際には職場側に様々な都合があり、かなり難しかったが、20班中7班が実体験することができた。

B校においては、生徒を主体的に職場訪問に取り組ませることに重点をおき実践した。

① A校の職場訪問実施結果内容表(10月14日実施)

NO	事業所名	紹介	実体験	内 容	訪問時間	分	ア	イ	ウ	エ
1	幼稚園	○	○	自己紹介→子供と遊ぶ→見送り→帰途→質問、説明	150		4	3		
2	家具店		×	見学、説明→写真→質問	45		2	3	2	
3	ケーブル放送		×	質問→見学(屋上、スタジオ)説明	45		3	2	2	
4	警察署		×	説明→質問→見学	95				2	5
5	自動車修理、運輸	○	×	質問→説明→見学	70		1	4	1	
6	煎餅製造	○	×	資料で説明→見学→質問	70		6	1		
7	信用金庫		×	質問→説明→見学	45		2	5		
8	大手コンピューター	○	×	資料で説明→見学→質問	165		6			
9	JR. A駅		×	質問→見学→説明	105				7	
10	消防署		○	説明質問見学→はしご車やいろんな車に乗る消防服着る	120		5	1		
11	総合病院	○	×	見学→説明→質問 (教師引率)	90		3	1	1	1
12	ファミリーレストラン	○	○	見学説明→ポテトあげたり食べ物作り試食→質問	100		7			
13	小学校	○	×	説明→授業見学→質問	110		3	4		
14	郵便局		×	質問→見学→質問	50		6	1		
15	スーパーマーケット	○	○	説明→魚切る、袋詰めバナナ→見学→質問	90		7			
16	百貨店	○	×	見学説明→質問	90		1	6		
17	自動車販売		○	説明→質問→見学→ワックスかけ	120		2	4		
18	和菓子屋		○	質問説明→箱詰め→赤飯のパック詰め	90		6	1		
19	市役所		×	見学説明→見学→質問	60		1	5		
20	スポーツ用品店		○	シール貼りウェア、スキーを並べる見学説明質問	100		7			
合計			9	7	平均90分		72	41	15	6

\*表中記号 ア:楽しかった イ:まあまあ楽しかった ウ:どちらかというとなんか楽しなかった エ:楽しなかった

54% 31% 11% 4%

②職場訪問直後のアンケート集計結果

			まあまあ	どちらかというと	
※ A校実体験の結果		楽しかった	楽しかった	楽しなかった	楽しなかった
実体験あり	7班(47名)	38名(81%)	9名(19%)	0名(0%)	0名(0%)
実体験なし	13班(87名)	34名(39%)	32名(37%)	15名(17%)	6名(7%)
※ A校紹介のある、ないの結果					
紹介あり	9班(60名)	38名(63%)	19名(32%)	2名(3%)	1名(2%)
紹介なし	11班(74名)	34名(46%)	22名(30%)	13名(17%)	5名(7%)
※ A校訪問時間の結果					
2時間以上	4班(25名)	17名(68%)	8名(32%)	0名(0%)	0名(0%)
1時間~2時間未満	12班(81名)	42名(52%)	22名(27%)	11名(14%)	6名(7%)
1時間未満	4班(28名)	13名(47%)	11名(39%)	4名(14%)	0名(0%)
				どちらかというと	
B校実体験の結果		とても楽しかった	楽しかった	楽しなかった	楽しなかった
実体験あり	10班(52名)	24名(46%)	24名(46%)	4名(8%)	0名(0%)
実体験なし	23班(113名)	44名(39%)	61名(54%)	8名(7%)	0名(0%)

分析及び考察

前表A校の職場訪問直後のアンケートの全体結果としては、楽しかったと答えた生徒が54%、まあまあ楽しかったが31%、どちらかというとなんか楽しなかったが11%、楽しなかったが4%であった。楽しかった、まあまあ楽しかったを合わせると84%であった。

次に実体験、保護者の職場紹介、訪問時間、職種別に分類して考察してみると次のことがわかった。

最初に今回の目的の1つである実体験のあった班と、なかった班との比較では、あった班が7班で47名、このうち楽しかったが81%、まあまあ楽しかったが19%、両方で100%という結果がでた。実体験のなかった班は13班で87名、楽しかったが39%、まあまあ楽しかったが37%、両方で76%であった。この結果から実体験がある、ないで大きな差がみられた。そして実体験があった方が明らかに楽しかったことを示している。このことは実体験をしなかった生徒の感想文の中にも実体験をしたかったという感想が、多くみられたことからもうかがえた。

保護者の協力ということで職場紹介を依頼したが、9箇所の職場を紹介していただいた。その結果、紹介がある職場とない職場での比較は、ある方が、ア・イで約20%上回った。紹介については、個々に異なるので、一概には言えないが、紹介してくれた保護者が、職場の担当者

との関わりで大部内容も違っていたように思われた。スーパーマーケットでは魚を切ったりパック詰め、レストランでは簡単な料理作りが行われ、全員が楽しかったと回答している。

訪問時間については、訪問時間が長くなるほど楽しかったと答えた生徒が多くなる傾向がみえるが、時間の長さよりもむしろ内容の充実度のように思われた。

職種別では、食品関係が圧倒的で93%を示している。食べることは生徒にとって最も身近なことで興味・関心を抱くのは言うまでもないが、やはり食品関係の4班のうち3班が、実体験があり、実体験が職場訪問の充実感ひいては意欲の高揚に大きくかかわることがわかる。

以上、全体を通してみると個々の職場の受け入れ態勢によって当然違うが、やはり職場訪問で最も生徒の意識を高めたものは訪問の内容であり、さらにその中で実体験が最も大きなものであったことがわかった。その結果この実体験があるとないとは、かなり充実感や意欲が、違うことが明らかになった。また、保護者の協力も実習の内容の充実には大きな役割を果たしていることも改めて認識した。

B校においては、全体の結果としては、ア（とても楽しかった）、イ（楽しかった）を合わせると93%を占め、ウ（どちらかというとなかなか楽しなかった）が7%、エ（楽しなかった）が0%という結果であった。ウについては、花店でできつい実体験をして疲れて大変だったなどの理由や病院に行った生徒は、ためになったが楽しいという問題ではないという答えがあり、単にウ（どちらかというとなかなか楽しなかった）ということで扱えない面もあった。そして、ウ、エが極めて少ないことは、各クラスから立候補により組織された進路委員会を中心に生徒主体で取り組んだ結果といえる。

次にB校においても、実体験があった方が、実体験がなかった方をア（とても楽しかった）が7%上回ったことは実体験が、職場訪問の充実度にとって重要ということを示している。

職場紹介については、32の職場のうち11箇所の紹介があった。そのなかには、消防署長さんや郵便局長さんが、もっと広く実習できる所をということで紹介していただくという、保護者はもとより地域の厚い協力があり、実施できたという特徴もあげられる。

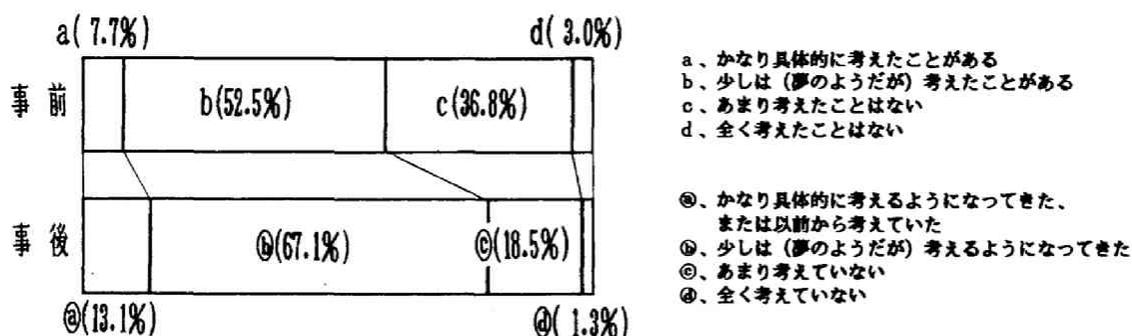
以上、2校の実践から職場訪問の体験学習で実体験を伴うことや、保護者や地域の協力、生徒主体に運営することがより効果的であるといえる。そして、職場訪問の実体験により生徒が働くことの大変さや、職業や仕事に関する具体的・現実的な理解を得られること、また、自己の将来（進路）についてより深く考える機会になることが、生徒の感想やアンケートからうかがえた。職場訪問の実体験は、主体的な進路選択能力を高めることのできる重要な進路学習の1つであるといえる。

(3) 職場訪問を中心とした進路学習における変容

A校、B校において、職場訪問に関連する学習の事前・事後のアンケートによる意識調査をおこなった。そして、その調査により生徒の意識の変容をとらえた。調査人数はA校、B校合わせて事前299名、事後298名である。

<設問1>「事前 あなたは中学生になってから、将来の自分の職業（仕事）について考えたことがありますか。

事後 あなたは今回の進路の学習を通して、将来の自分の職業（仕事）について考えるようになりましたか。」



事前・事後のアンケート調査を比較すると、aと回答した生徒は、全体的にはまだ少ないようであるが、bと回答した生徒は増え、c・dと回答した生徒が大幅(約半分)に減少した。これは、今回の進路学習を通して、将来の自分の職業(仕事)について考えるようになったといえる。

<設問2>「事前 あなたは、何に一番重点をおいて職業を選択したいと思っていますか。

事後 あなたは、この進路学習を通して、何に一番重点をおいて職業を選択したいと思いましたか。」

※自由記述・複数回答で行い、増減の差が激しかったものを下記に示した。」

回 答 例	事前	事後
収入が多いかどうか	64	45
楽しくその仕事ができるかどうか	27	15
やりがいのある仕事かどうか	7	22
自分に合っているかどうか	43	78
自分のやりたい(好きな)ことができるかどうか	56	71

「収入が多いかどうか」が64から45、「楽しくその仕事ができるかどうか」が27から15と減

少し、「やりがいがある仕事かどうか」が7から22、「自分に合っているかどうか」が43から78、「自分のやりたい（好きな）ことができるかどうか」が56から71と増加している。働く人の話を聞いたり、生き生きと働く姿を見たり、友達の得た情報を共有することにより、仕事の表面的な収入や楽しく仕事をするよりも、やりがいのある仕事や自分に合っているとか、自分のやりたいことができるという個性を生かせる仕事を選択したいと考える生徒が増加した。この進路学習を通して、職業を選択するには収入に代表される労働条件（仕事の外的な条件）だけではなく、その仕事が自分に合っているか・できるか等の自分の適性・能力を考えることが大切であることが理解されてきたと考えられる。

〈設問3〉「事前 あなたは、人は何のために働くのだと思いますか。

事後 あなたは、この進路学習を通して、人は何のために働くのだと思いましたか。」

※自由記述・複数回答で行い、増減の差が激しかったものを下記に示した。

回 答 例	事 前	事 後
生活していくため（金のため）	159	124
家族のため（親のため）	44	55
自分のため	91	131
人（社会）の役に立つため	70	109

「生活のため」が159から124と減少し、「自分のため」が91から131、「社会に役に立つため」が70から109と増加している。この進路学習を通して、働くのは生活のためだけではなく、自分を生かすなどの自己実現のためや、それぞれの仕事が社会を形成する大切なものであり、社会のために働くことが理解されてきたと考えられる。

〈設問4〉 あなたは、将来希望する職業に就くためには、これからどのようなことをしていかなければならないと思いますか。（事後アンケートのみの設問）

【回答例】

- ア：今を大切にして、勉強を一生懸命がんばる。
- イ：学力をつけると共に、何にでも打ち込める姿勢を作る。
- ウ：どんなことにも積極的に参加したりする。
- エ：自分の就きたいと思った職業について、いろいろと知識をつけておく。
- オ：私は将来看護婦になりたいから、今はお年寄りに親切にしたりなど、身の回りのことから始めたい。
- カ：学力をつけて、健康なからだを作り、社会のマナーを覚えること。

ア・イ・ウに代表されるように、将来希望する職業に就くためには、日常の学習活動を始め学校生活全般に主体的に取り組むことが必要であると記述した生徒が70%以上を占めた。また

エ・オ・カのように、将来の職業について深く知り、社会と関わりながら目標に向かって努力していこうという記述が、25%程度あった。

全体的に、長い目で将来を見つめ、自ら進んで意欲的に活動しようという姿勢がうかがえる。実際の職場訪問において現場の生の声から学び、さらに発表会等で個々の体験の報告から吸収した結果、このような姿勢が形成されたものと考えられる。

〈設問5〉 今回の進路学習を通して感じたことを自由に書いてください。(事後アンケート)

【回答例】

ア：働く人の姿を見て、働くとはどういうことなのか、前よりもよくわかった。  
イ：人のため、そして自分のために働くことはとてもいいことだと思う。自分のやりたい職業に就いて、一生懸命働いている方々がとても輝いて見えた。  
ウ：今回の体験によって、改めて仕事のたいへんさがわかった。  
エ：楽しく仕事をするのがこんなに幸福か、わかりました。  
オ：みんな自分の職業に誇りを持ってすごいと思う。私もいつか仕事に就いたら誇りを持てるようにしたい。  
カ：今まで、その仕事に就くにはどうしたら良いかなどわからなかったことが、今回の進路学習を通してよくわかった。  
キ：地域の人たちが協力してくれる様子を見て、「やっぱりこの人たちにも子供の頃があったんだなあ。」と思いました。  
ク：貴重な体験だったと思う。普段できないことをやらせてもらって、また、いろいろな話を聞いて勉強になった。めったにできない体験ができたと思う。また機会があったらやってみたいと思った。  
ケ：「とにかく今の勉強を最低限やる！」どの職業の発表を見ても、大体同じことを言っていた。だから、何になるためにも、今の勉強が大切なんだ。

ア・イのように勤労の意義や尊さに触れた感想、ウ・エ・オのように働くことの厳しさや喜びを体得したという感想など、勤労観や職業観に関する記述が最も多かった。また、カをはじめ、仕事に就くための道筋を知ることができたという感想や多くの職業の仕事内容がわかったという感想など、進路についての理解が深まった点をあげた記述も目立った。

今回の職場訪問は、保護者や地域の協力によって実現できたのだが、このことが生徒にも伝わったことが、キの記述からもうかがえる。また、職場訪問において実体験を重視し、さらに事後指導において個々の体験の共有化を図ったが、ク・ケの記述などから推察すると、多少なりとも成果は上がったと言えるのではないだろうか。感想を総括してみると、当初設定した職場訪問の5つの目的は、十分達成されたと考えられる。

〈考察〉

今回の進路学習を通して、今まで漠然としていた将来の職業について、実際に見たり聞いた体験したりして、具体的に考えられるようになった生徒が増えた。実際にいきいきとした働く人の姿を見ることにより、自分の適性や能力を顧みることができ、また、一生懸命働くことの美しさを感じとったように思える。これらは、ふだん教室では学ぶことのできない体験学習が生かされた結果だと考えられる。

## 5. 進路指導分科会の研究のまとめと今後の課題

### (1) 実体験や体験の共有は、生徒の意欲を高める。

将来の自分の職業（仕事）について「あまり」「まったく」考えていない生徒が約20%と半分になり、「具体的」「少しは」考える生徒が80%に増加した。そして、「自分の適性を生かす」ことや「自己実現」「他の人や社会のため」を、重点にして職業を選択しようと考えた生徒が増加したことに、意欲の高まりをみることができる。

### (2) 体験の共有が出来るような工夫が、意欲を高めるうえで重要である。

カメラを使用した記録、冊子の作成、文化祭や発表会での展示、体験発表会・報告会での視聴覚機器の活用や役割演技による報告等が、生徒相互の交流を生みだし、体験の共有を促進していった。生徒全員が実体験できるとは限らないので、体験の共有のための工夫が、この学習の重要な点であった。

### (3) 生徒の主体的活動が意欲を高める。

生徒の実行委員会や進路委員会が、実践の各場面で活動した。発表会では班全員が感想を述べるなど、取組みの全過程が、生徒の主体性を育て、自主性を引き出していった。

### (4) 生き方を問直すような問いかけが、生活を見直して意欲を高めるうえで重要である。

「この前の発表会で仕事の大切さと忙しさがわかりました。私の家は親が二人働いているので、これからは助けていかなければならないと思いました。」と感想を述べ、冊子を読んだり、発表を聞いたりして、日常の自分の生活を見直しているのである。学級においても、学習についての考え方・見方や職業をふりかえることは、意欲を高めるうえで重要であった。この点についての教師側の発問の内容を今後とも工夫していかなければならない。

### (5) 実体験を柱にした三年間の指導計画をたて、これをなすとげる指導体制を確立する。

企画立案・訪問の依頼と訪問先の選定など学年教師の分担と協力によりなすとげられた。実体験を柱にした進路学習に継続的に取り組むためには、学年体制・学校体制を確立することが重要である。それと同時に、実習体験の時期や規模・内容等検討して学校の教育課程に位置づけ、年間計画に組み入れて指導時数を確保することが必要である。

### (6) 保護者・地域の協力と信頼を広げる。

この学習は、PTAの役員や委員の方々、保護者、地域の企業の協力がなければ成立しない。多くの職場での実習体験をめざしたが、3分の1の実施であった。実施できた事業所に、お礼の手紙を送ったところ激励と期待の返事をいただいた。回を重ねることにより、学習の趣旨が一層理解され、成果があがることが確信できる内容であった。

### Ⅲ 生活指導分科会の研究

#### 生活指導分科会副主題

一人一人の生徒が生き生きと活動し、自己実現の図れる指導の工夫

#### 1. 副主題設定の理由

目まぐるしく変化する社会にあって、生徒一人一人が自己の個性・適性を生かし、生き生きと活動し、生涯を通じて自己実現を図っていくことがこれまで以上に大切であると思われる。しかし、今日の中学生の姿を見ると、「授業に臨む姿勢に積極性がない」・「道徳・学級活動で活発な意見が出ない」・「クラブ活動が不活発である」等々という言葉を目にする。集団の中で主体的に取り組み、自分の思っていることを言葉・行動として表現することが十分にできない生徒が増えてきていると思われる。生徒が充実した学校生活を送るためには、生徒一人一人の理解を図り、自分の考え、感じ方、行動を振り返らせるとともに、生き生きと活動する機会と場を与えることが大切である。このような考え方に立ち、教科の学習、学級活動、学校行事等の中で、生徒自らが特性、能力を発揮できる指導はどうあるべきかを追求するため、本副主題を設定した。

#### 2. 研究の方法

##### (1) 基本的なとらえ方

研究実践に当たり、副主題にある「生き生きと活動し、自己実現を図れる」とはどのようなことか、生徒への予備調査を実施し、生徒の立場から明確にしようとした。その項目は、以下のとおりである。

- 「自分が役に立っている」という気持ちを、いつ・どこで感じているか。
- 「やりとげた、満足した」という気持ちを、いつ・どこで感じているか。
- 「自分らしさが出せた」という気持ちを、いつ・どこで感じているか。
- 「自分の存在が認められた」という気持ちを、いつ・どこで感じているか。
- 「活動に喜びをもったり、熱中した」という気持ちを、いつ・どこで感じているか。

##### (2) 研究の経過

〔4月～8月〕

上記の項目について、生徒の実態を把握するために、授業・部活動・学校行事・生徒会（委員会活動）・学級活動・日常生活等々の面からアンケート調査を行った。このアンケートは、目的を「生徒はいつ、どのような場で、自己実現を図ろうとしているかを把握すること」に置き、2度の試案作成・実施を経て、研究員所属校10校、各学年1クラス、総生徒数約1,200名を対象として7月に、択一方式で行った。

次に、アンケートの集計・分析・考察から、「自己実現を図る具体的な指導の工夫のあり方」について仮説を立てた。

#### 仮説

「教師主導型の教育活動からは、生徒の生き生きとした姿は生まれにくい。従って、教師は、生徒の主体性を大切にし、その活動の機会と場を設定することによって、生徒は、新鮮さや喜びを実感し、生き生きと活動するようになる。」

[9月～11月]

仮説に基づいた実践を行うために、自己実現に関する研究員所属各校の取り組み・実践例を持ち寄り、実際にどのような取り組み・実践ができるかを話し合った。その際、実践は、対象人数が多いことと、2～3ヶ月程度の比較的短期で完結できるものが望ましいことを確認し、具体的な実践例として、「学校行事（学芸発表会）」「学級活動（班活動を主体とした日常的なもの）」「教科授業（生徒主導型の授業づくり）」を設定した。

### 3. 研究の内容

#### (1) 生徒の活動場面と充実度・満足度の意識に関する調査

##### ① アンケート調査のねらい

アンケート調査では、一人一人の生徒が教科の学習・学校行事・学級活動のそれぞれの場面でどのような取り組みをしているか、そしてその根底にある意識について実態調査する。

##### ② アンケート調査の結果

###### ア. 教科の学習

- ・教科の学習で意欲的に発言している生徒は、男子では3割が先生や、仲間に認められたと思っており、女子では5割が授業を活発にしたいと考えている。
- ・学習形態はグループ学習などの活動が中心の授業を望んでいるものが4割と多い。

###### イ. 学校行事

- ・クラスの一員として頑張りたいと思っているものは8割と多いが、その反面、リーダー

シップを発揮しようとするものは1割に満たない。

- ・6割の生徒は創意工夫ができる場や機会をもち、自主的な活動をしたいと思っている。

#### ウ. 学級活動

- ・活動を通しての喜びを感じているのは、仲間と協力したときに強く感じている。
- ・活動形式としては、6割の生徒がもっと自分たちに任せてほしいと望んでいる。
- ・学級内でみんなのために役立っていると感じている生徒は約4割と少ない。

### (2) 考察

実態調査から、生徒は学校生活の中で仲間を大切にする意識は高く、学習内容や部活動に興味や関心をもっている。また、学級での仕事や委員会活動、生徒会活動など自分たちの手でやり遂げたいという意識も見られるなど、学校生活での充実感を求める傾向や向上への意欲があることがわかった。こうした生徒の意識は、自立への欲求の現れであり、新しいものへの期待感によるものと思われる。

一方、学習活動等での自信のなさや責任ある仕事を積極的に引き受けようとする姿勢が弱いなどの面が見られる。さらには、自分自身に対する有用感が低いなど、自己評価が低い。これは、実際に達成感や有用感を味わった経験が乏しいこと、全体と同じ行動をとろうとする姿勢が身につけてしまっているからと、考えられる。

アンケート調査の結果より、今日の中学校は、仲間同士での主体的な活動を望んでおり、教師が生徒を信頼し生徒の発想を引き出しながら機会と場を与え、主体的な活動をより多く経験させることが必要であることが分かった。

そこで、わたしたちは生徒の発想を生かし、主体的に活動させる機会と場を工夫し実施することにした。

### (3) 具体的な実践例

#### ① 学校行事を通して——展示発表の工夫の実践—— A校

##### ア. 設定理由

一般に文化祭・学芸発表会における「展示発表」は、既定のテーマについての調査発表を模造紙によって行う形態が多くとられている。そのため脚光を浴びる「舞台発表」への関心・取組みに比べて、あまり評価されることも少なくない。また生徒の意欲も欠けがちで、一部の生徒が義務的に携わり、大半の生徒は傍観者の状況におかれる傾向にある。

そこで、「舞台発表」にも負けない興味と意欲のわく「場」を設定し、一人一人が責任と喜びをもって活動する状況を創り出し、生徒の自己実現を図ることが必要であると考えた。

## イ. 「スライド・OHP」による映画製作への取り組み実践例

### (ア) 方法

- a. 発表の場——学芸発表会の「展示発表」として、2日間教室にて上映する。
- b. 班編成——学級の枠をはずして、展示発表部門への希望調査をとり、10名前後の班編成とした。
- c. 作品の内容——班ごとに企画する（ドラマ・ドキュメンタリー・調査研究など）

### (イ) ねらい

- a. 作品の内容を自由に企画させることにより、個々の興味・関心を多様に引き出し、その内発的意欲を喚起し、主体的な活動、創造的な態度を高揚させる。
- b. 班を自由に編成させることから、仲間との協同作業の楽しさを味わわせると共に、それぞれに伴う有用感や責任感を高める。
- c. 作品に対する反響がはっきりと判ることから、充実感や改善への意識を高める。

### (ウ) 製作の過程

①希望調査（9/16）——（舞台部門との人数調整）——②班編成（9/24）——③概要提出（9/30）——④シナリオ提出（10/12）——⑤撮影済フィルム提出（10/21）——⑥録音済テープ提出（10/26）——⑦宣伝ポスター作成（10/27）——⑧試写会（10/28）——⑨前日準備（10/29）——⑩学芸発表会（10/30・31）

### (エ) 評価の観点

- a. 生徒の意欲づけや今後の主体的活動へのきっかけとなったか。
- b. 創造的な協同作業を通して、自己実現していくことの喜びを味わえたか。またそのプロセスの中から困難を克服していこうとする前向きの姿勢が生まれたか。

(オ) 各班の活動状況

班	A	B	C	D
人 員	男9名 女4名	男9名	男8名 女3名	男10名
タイトル	禁断の愛	サイボーグ	電球屋人トヨダマン	ノストラミネーター
作品の概要	青年(S君)が花嫁を求めてある女子学園に乗り込む。そこに現れる少女(Nさん)との愛が結ばれる。	未来の犯罪多発都市。博士が3体の犯罪捜査用ロボットを完成した。博士を誘拐してサイボーグ破壊をねらう悪玉との戦いが始まる。	普段は帽子をかぶっているマリモ男が、長髪悪魔団と戦うために、トヨダマンに変身する。しかし、彼は力がなく弱かった。	未来から古い専用の液体金属ロボットが送り込まれる。これをテレビ局の2人が追跡する。
活動状況	おとなしい男子(S君)とおさない感じの女子(Nさん)を主演にしているため、他の生徒の動きと役割が重要となる。しかし、よくフォローしたと思う。特にS君にとっては忘れ得ぬ思い出となったことだろう。	撮影は衣装や小道具に凝っていて、いろんな所にロケーションに行っていた。「音」作りも意欲的で何度も撮り直していた。みんなとても楽しそうに活動していた。今から続編を計画中である。	途中、撮影済のフィルムを1本不注意から無駄にしたり、仲間のカメラが壊れたりしたことから、チームワークに亀裂が入った。しかし、「画像」と「音」が良く工夫されていて観客の評判が良く、みんな満足して喜んでいた。	途中班長が交代したり、召集をかけてもそろわなかったりで相当苦労していた。なかなか作品が完成できず、深夜まである家庭で製作するという状況であった。その中からいろいろ考えを深める生徒もいた。
実践後の感想(アンケート調査の中から)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・S君やNさんの意見を尊重できればと思いました。S君が以前より開放的になることができたので、うれしく思いました。</li> <li>・思うようにいかず、いらいらしたりした。しかし、作品が完成した時、その大変さも忘れて、また、来年やりたいと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分たちが考えないと始まらないこの企画に興味があったが、やってみると、みんなの考え方や日頃の生活がよくわかった。</li> <li>・考え方や友達との関係についていろいろ学べたと思う。また来年続編を!</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と過ごす時間が増えて良かった。</li> <li>・みんなで協力して作品を作っていくことが、とても楽しかったので、ぜひ来年もやりたい。</li> <li>・ちょっと自分勝手に行動してしまったことで友達に反発をくらってしまった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなことがあっても、みんなで考え解決していくことの大切さがわかった。</li> <li>・みんなで作りあげたものを観て、びっくりした。他の作品とは少し劣るかもしれないけれど、良かったです。</li> </ul>

※ 上記のほかに、男6名と男8名の2つの班がある。

(カ) 実践後のアンケート調査

- ① あなたが展示部門を希望した動機は何ですか。一つ選びなさい。
- a 友達と自由に班が作れるから (24%)
  - b 自由な発想で作品を作ることに興味がわいたから (69%)
  - c 舞台部門より楽できそうだったから (5%)
  - d その他 (2%)
- ② 自分の存在をアピールできましたか。
- a 充分できた (15%)
  - b まあまあできた (56%)
  - c あまりできなかった (27%)
  - d まったくできなかった (2%)
- ③ 仲間との活動は楽しかったですか。
- a とても楽しかった (57%)
  - b まあまあ楽しかった (30%)
  - c あまり楽しくなかった (13%)
  - d つまらなかった (0%)
- ④ 友達が増えたり友情が深まったりしましたか。
- a とてもそう思う (25%)
  - b いくらかそう思う (52%)
  - c あまり思わない (19%)
  - d 全く思わない (4%)
- ⑤ 作品が完成したときの気持ちはどうでしたか。
- a とてもうれしかった (66%)
  - b まあまあうれしかった (22%)
  - c あまりうれしくなかった (10%)
  - d うれしくなかった (2%)
- ⑥ この活動を通して、以前より感じたこと。(いくつ○をつけてもよい)
- a 仲間と協力することの大切さ (63%)
  - b 積極的に行動することの大切さ (33%)
  - c 困難を乗り越えていこうとする意志の大切さ (33%)
  - d その他 (2%) - [例] 仲間と同じ目標を目指し、達成できたときの喜び
- ⑦ これからの学校生活の中で、今回のように自分たちで企画し、自ら行動し、そして何らかを創りあげていく場面がほしいと思いますか。
- a とても思う (50%)
  - b まあまあ思う (44%)
  - c あまり思わない (4%)
  - d まったく思わない (2%)

ウ. まとめと今後の課題

今回の創造的な活動を通して、個の内なる興味・関心・自己実現への欲求を、集団とのかかわりの中から、それぞれの試行錯誤、困難への対処のプロセスを経て、ほとんどの生徒が、仲間を相互に尊重して協力し合うことの大切さや、自己有用感、作品完成の達成感等の喜びを感じとってくれた。

今、生徒たちが味わっているこの充実感を、さらなる高次の活動へとつなげるため、我々教師としては、個および集団の心の動き、希望を常にみつめ、その興味・関心・自己実現の欲求を、いかなる有意なる活動として設定し、実現しうるか、創造的姿勢をもって考えていく必要がある。

同時に、単なる生徒の興味本位の発揚とならないよう、日常的にも生徒の心情・意識の深化、育成を図ることが、基本にあることを忘れてはならない。

② 学級活動を通して－合同委員会および班長会による活動を中心として－B校

ア. ねらい

- (ア) 合同委員会、班長会を中心とした話し合い等により生徒の主体性を高める。
- (イ) 遠足や班新聞コンクール等の場を通して生徒の有用感、責任感を高め、みんなで協力して生き生きと活動できるようにする。

イ. 活動内容

(ア) 合同委員会について

各学級の中央委員と生活委員男女1名ずつを選出し、合同委員会を組織する。生徒全員が生き生きと充実した生活が送れるように週一回定例会を開き、学年目標の設定、各学級の活動計画および情報交換、問題点の改善、遠足や班新聞コンクール等の行事の企画運営等について話し合いを持っている。

(イ) 班長会について

立候補によって選出された班長と合同委員によって週一回班長会を開いている。話し合いの内容は合同委員会を受けたものであり、それらを学級レベルのものにしたより具体的なものとなっている。また学級活動の計画や班の編成等についても中心的に活動している。

ウ. 具体的活動その1 ～遠足～

合同委員会および班長会を中心にその目標や約束ごと等が決められた。各班はそれらをもとに数多くの話し合いを持ち、当日はもちろん事前事後にわたって生徒の主体的活動が生き生きと展開された。具体的には事前における目標や約束ごとの徹底、ポスターや印刷

第2回合同委員会ニュース 平成5年 5月7日 1年合同委員会

〈遠足の反省〉

合同委員会では遠足の反省として、

①遠足の目標の反省  
 ・一年最初の楽しい思い出にしよう  
 ・反省を深めよう  
 ・話し合いを大切にしよう  
 ②夏の間いそいそと準備しよう

③各々の合同委員から  
 班長……全体によくできた  
 生活……ちゃんと作れた  
 遠足……準備が足りなかったところ  
 反省……話し合いが足りなかったところ

3つの目標のうち最初の2つは守れたという意見が多かった。3つ目の話し合いを大切にしようという目標は守れなかった。話し合いが足りなかった。話し合いが足りなかった。話し合いが足りなかった。

〈アンケート集計結果〉

みなさんから協力いただいたアンケートを集計しました。

(1) 遠足は楽しかったですか?  
 はい108人 いいえ6人  
 いいえの理由 (準備が足りなかった、話し合いが足りなかった)

(2) 話し合いの反省  
 ①話し合いが足りなかった  
 中の人 6人 中の人 4人



(一年) 第四回 合同委員会ニュース 6.16(水)

班新聞コンクールを行います!!

はげめるね、班で協力する事を学ぶため。

形式 班新聞用紙 一枚  
 各目的ルームにはリポート、投票する。  
 (自分の班以外のものをBEST3を選んでも可)

内容 例記事 絵、写真なども入れる。  
 必ず入れる記事 (班員の中のおもしろい記事、スポーツニュース)  
 ・新聞の名前も工夫する。  
 ・記事の最後に必ず書いた人の名前を入れる。  
 ・その他 7人、夏休みや部活について、クイズ、パズル、コママンガ、最近の社会記事 など。



物によるよびかけ、班員全員による班カードやしおりの作成および買い物、当日における目標や約束ごとの確認と達成、係活動の遂行、事後におけるアンケートの実施とその結果に基づく反省会等があげられる。

#### エ. 具体的活動その2 ～班新聞コンクール～

班の協力の必要性がさげばれ、それを学ぶ方法の一つとして班新聞コンクールを実施した。これについても合同委員会と班長会が中心となり、その発案から計画実施さらに事後の反省にいたるすべてが生徒の主体的活動に委ねられた。

#### オ. まとめ

今回は合同委員会および班長会といった組織的な活動を中心に研究を進めたが、生徒が自分たちの手で主体的に決めたことについては、生徒同時お互いに認め合い、協力し合い、生徒全員が生き生きと活動するようになるものであることを確認できた。

### ③ 教科の学習を通して ー体育・バレーボールの実践ー C校

#### ア. ねらい

- (ア) 練習計画を自分たちで立て、自分たちにあった「攻め方」「守り方」を工夫し、ゲームを楽しめるようにする。
- (イ) 自分たちの課題を見つけ、その課題を達成するためにみんなで協力できるようにする。
- (ウ) 一人一人が学習する中で自分の存在感や成就感を感じることができるようになる。

#### イ. 指導の手立てと工夫

- (ア) チームづくりは自分たちの話し合いで生徒の手で編成する。(1チーム6人)
- (イ) 各チームで必要な係を独自に決める。(一人一役)
- (ウ) ルール、フォーメーションを自分たちで考える。
- (エ) グループノートに自分たちで練習計画を自由に考え、毎時間活動する。
- (オ) 生徒たちが自ら課題を見つけ練習やゲームに取り組み、教師は生徒達の助言者という立場をとる。

#### ウ. 学習の流れ

##### (ア) 内容

1時間目～3時間目      グループづくり、グループノートづくり、指導計画などの説明と体操、トレーニングを独自に作り、ルール、フォーメーションについて考える。

- 4 時間目～12 時間目 自分達の練習計画にそって練習を行う。  
 10分間－体操・トレーニング、20分間－練習、10分間－ゲーム  
 10分間－整理体操・反省（グループノートに記入）
- 13 時間目～14 時間目 リーグ戦

(イ) グループノート

「指導計画」「知識」「練習計画」「反省（個人・チーム）」「作戦カード」などを使ってグループノートを作成し、チームで管理する。授業が終わるごとに次時の練習計画をチーム全員で考え、毎時間の授業の前の日までに提出し、指導・助言をキャプテンが受ける。授業中はグループノートの計画にそって行い、ゲームでは、予め立てた作戦（フォーメーションなど）で、練習した成果が出せるようにする。最後の5分間はチームでミーティングをひらき、本時の反省を行う。次時の練習計画を教師が見るときに前回の学習の反省も合わせて指導・助言を加える。

はじめは、無理な計画やただ楽しいだけという計画もあったが、教師からの一言を入れることで生徒への意欲づけになった。

エ. 生徒の感想

- (ア) グループで計画を立て、練習したりすることがとても楽しく、生き生きと活動できたのではないかと思います。
- (イ) 1・2年の時はあまり体育は得意でなかったが、3年になって自分たちが計画を立てて行ったことがとてもよかった。
- (ウ) 友達とチームをつくりお互いに助け合っでプレイをするのが楽しい。チームワークを通して友達との信頼関係づくりができると思う。
- (エ) 自分たちのやりたいことや、いろいろなことができた。こういう授業はいい、とてもいいと思う。
- (オ) 自分たちで考え学び、教え合っでバレーボールをするところにとっても満足感があつた。
- (カ) 自分たちにすべて任されると、先生に全面的に信頼されているんだ、という満足感と、

バレーボールの練習計画

グループ名 ダイナマイズ

7月21日 木曜日 第6 時間目	
本日のねらい レシーブをマスターする ゲームらしいゲームをする	
本日の練習項目	本日の練習内容（具体的に）
ストレッチ	9→8→7→6→5→4→3→2→1 10分
直上バス	10回 1人 2人 3人 4人 5人 6人 7人 8人 9人 10人
アタリの直上バス	練習 20回
振り回し	30回
振り回しII	30回
振り回しIII	5回
ポジション練習	A B C Bはバスケット Aはバスケット Cはバスケット
ゲームイニシエーション	練習

それに答えなければという責任感が生まれました。これからもこのやり方でやってほしいと思いました。

- (\*) 計画ノートを作ったことで、授業の前から班員が協力して計画を立て、団結できてから学習に取り組めたことがよかった。
- (ク) 授業後生徒にアンケートをとった結果、「今回の学習はグループを中心に進めてきました。今までの一斉学習と比べてどうでしたか。」という設問に対して『今回のようにグループでできるほうがよい』と回答した生徒が93%を占めた。

#### オ. 成果

- (ア) 生徒が毎時間の学習計画を自分たちで考えることによって、自分たちでやらなくてはという自覚が生まれてくる。
- (イ) 「自分たちで考える」「自分たちで活動する」という場があたえられる満足感がある。
- (ウ) 学習中遊ぶ生徒がなく、それぞれ課題を持ち、その課題達成のためにお互いに教え合いチーム力を高めていくという目的のために生徒たちは熱心に取り組んでいる。
- (エ) キャプテンを中心に「どうしたら巧くできるようになるか」など問題意識が生まれ、練習の方法にも工夫が見られるようになる。
- (オ) チームのレベルに合った課題を見つけ、意欲的に取り組む姿勢が見られる。
- (カ) 能力的に低い生徒にも意欲的な面が見られる。
- (キ) 生徒の意欲が高まった中で教師が適切な指導、助言を与えることによって、一層浸透していく。

#### カ. 今後の課題

- (ア) 体育の学習であるため、ただ楽しかっただけで終わってはならない。「全体、個人のねらいがどこにおかれているか」などしっかり計画を立てさせることが大切である。練習計画は、授業時間内で行っていると運動量が少なくなるので、休み時間などを利用して行ってきた。しかし、班員が集まりグループノートを記入する場の設定が生徒まかせになってしまった。今後もグループノートの念入りな吟味と計画を立てる場の設定が必要になってくる。
  - (イ) 学習活動の系統性はどうなっているのか。今回3年生男子を対象にしたが、1年生などでは自分たちで練習計画を立てることには無理が生じないだろうか。1年生のみならず計画の立てさせ方、立案時、活動時の指導・助言の与え方が重要になってくる。
- 以上、計画の立てさせ方、学習の系統性、教師の指導・助言の仕方など今後の課題であるが、我々は常にこのことについて考え、よりよい指導に努めなければならない。

#### 4. 生活指導分科会の研究のまとめと今後の課題

「生徒の活動場面と充実度、満足度の意識」に関する調査研究の結果、学校生活における日常的な自治的な活動だけでなく、学校行事や教科の学習でも、主体的に企画の段階から生徒自身の手任せることによって、一人一人の到達目標に応じた活動が生き生きと展開されると考えた。

こうした考えに立ち、

「役に立つ経験が豊富で、自分自身でもそれを実感している生徒」

「自信をもって、責任ある仕事に取り組む生徒」

「学校生活の中で、“存在感”を感じられる生徒」

に育つことを期待して、今回の実践を試みた。

今回の実践では、かなり多くの部分を生徒に任せているので、生徒自身で工夫、協力し合いながら活動することになり、どうしたらうまくいくかについて、より主体的で積極的な参加がみられるようになった。こうした実践を通して、生徒は望ましい思考力・判断力を身につけ、自己の有用感を感じていくことになる。教師主導型の活動では、生徒は教師の意向に沿うよう行動しなければならないと考えがちで萎縮してしまい、子供本来の生き生きした活動にならないこともある。そこで、生徒の主体性を大切に活動の場を与えることが大切である。

今回の研究では、現場の実情を踏まえ、実践的かつ具体的な問題として、どのような場面を設定すれば、生徒が自己実現を図れるかについて研究を進めてきた。そのなかで教師の適切な助言が、生徒の活動の質を高める上で重要であることも改めて確認された。

そして、次の3点を今後の課題とした。

- (1) 生徒に任せやすい課題は何かを再検討する必要がある。

特に教科の授業で実践するときには、時間配分や教科間での連携も踏まえ、学校全体としての方針をたてる必要がある。

- (2) 生徒への効果的な助言の方法はどうあるべきか。

生徒の活動の質を高めるためには、適切な方法で適切なときに助言を与える必要がある。

- (3) 生徒の期待する活動場面を知る手立てはどうあるべきか。

生徒に活動させるためには、生徒がどのような活動場면을期待しているかを常に知っておきたい。どうしたら、それを知ることができるか。